

鎌倉の庚申塔に関する調査について

1. 既存資料データ(先行調査文献)について

基本文献としては、「木村彦三郎著 鎌倉市文化財資料第8集 道ばたの信仰 1973年」(以下、「木村」と略す)があり、後続の文献も、この文献を参照している。後続の文献として「堀孝彦著 名古屋学院大学論集 鎌倉の庚申塔(1991～95年調査記録)」(以下「堀」と略す)がある。また、鎌倉マニアであろうと思われる者が調査しWEBに掲載した記録(2002～3年調査、以下「WEB」と略す)(<http://www.kcn-net.org/koshin/index.html>)がある。「木村」と「堀」では、かなり相違があるが、「堀」では「木村」を参照しつつ、「木村」には誤記録がかなりあると記載しているので、どちらかと言えば、「堀」の記載が正確だろうと思われるが、解釈の相違で木村が正確な場合もあり、背景の解説は「木村」のほうが詳しいので、両者を参照しつつ、現地調査を行う。「WEB」の記載は写真付きであるが、「木村」を見て現認し、「木村」の文章をそのまま取り入れている箇所が多いので、参考程度とする。

2. 報告書の方針

調査日別にひとつの文書とする。各文書では場所別にひとつの単位とし、その場所にいくつの庚申塔があるかを示し、場所単位に既存資料データと調査記録を示す。各庚申塔単位に既存資料データと調査記録をまとめない理由は、既存資料データにおいて、庚申塔の並びの順番を間違えている場合もあるからである。

まず、先行調査文献について庚申塔の形状、刻印されている内容、サイズについて「木村」「堀」の相違点を明確にして記述する。庚申塔の解説、場所などの記述は省略する。文字に下線があるものは「木村」の記載、イタリックになっているものは「堀」の記載である。みざる いわざる きかざる について3つが揃っているか揃っていないように見える場合は、三猿(みいき) などのように示す。括弧のなかは並びの順番を先頭一文字のひらがなで表している。単独の場合は、それぞれの形態を表している。

次に、調査結果について記述する。「木村」「堀」の調査時点よりさらに年月が経過し、風化が進んでいるので、「木村」「堀」で読むことができても今回の調査で読むことができなくなっているものもある。「木村」「堀」で記述内容が一致し、調査結果もそのとおりまたは、はっきりしないがそのとおりと推定されるであれば、「記載どおり」と記述する。しかし、なかには両者が一致していても、よく確認すると実際は異なっている場合もあった。先行する「木村」に引きずられて「堀」も誤読することがあることを示している。「木村」と「堀」の記載内容が異なる場合は、いずれが正しいか、あるいは判断不能かなどについて記載する。「木村」において刻印された文字を新字体で記されている場合があるが、活字印刷の都合でそうなったのであろうと考えられるので、調査結果の相違点とはしないこととした。サイズについて、木村で記載しているサイズは台石を考慮していないが、それを考慮したうえで「堀」との誤差は数ミリ程度であれば測定の方法による誤差として許容し、再計測しな

かったが、それ以上であれば確認可能な範囲で確認した。

また、調査記録の項には、先行文献の記録における背景の記述の引用はできるだけ避けた。独自の調査記録なのかがわからなくなるためである。

庚申塔調査以外に立ち寄ったところの記録は調査付記として記載した。

なお、例外として巡礼古道に関しては、状況が他の庚申塔と全く異なるため、纏め方としては独自のものとなっている。

3. 種子について

調査記録に種子が時々でてくるが、調べたところ、だいたい次のような文字である。

種子「カ」 種子「キリーク」 種子「ウーン」

地藏菩薩 阿弥陀如来 金剛童子

